

池窪弘務作品集3 一九九五年（四十九歳）

バスが行く（ラジオドラマ）

1995-09-30（FMシアター）

登場人物

うた
ゆめ
平三郎
音吉

幸助
孝之
秀雄
風やん

先生（女）

生徒A（女）

生徒B（女）

生徒C（男）

算盤の男 A、B、C

孝之を送る人々

背後の声

クラブの客の声

司会者

通天閣の小屋の客

手品師

子供A（女）

子供B（男）

女の子の母親

トンボつりの子供

警官

（風の音。離れて、うたが歌うりんご追分けが聞こえてくる）

うた「りんごの花びらが

風に散ったようなあ

月夜に、月夜に、そつと

え、え、え

津軽娘が泣いとさ」

（歌が少し遠くなり、科白が重なる）

ゆめ「うたちゃん、相変わらずええ声やなあ。なんや、遠い昔から、聞こえてくるようやねえ」

平三郎「百年の昔から聞こえてくるみたいや。わしらも、百才、百才」

音吉「（笑って）4人で400才や」

ゆめ「もう21世紀も半ばまでできてしもた。平三郎はん、長い間生きたもんやなあ」

平三郎「ゆめちゃん、わしは、ほんの一瞬やった気がする……。どうしたんや、音吉、涙なんか浮かべて」

音吉「あの歌聞いてると、いつも、なんや、胸一杯になるんや」

（歌声が止む）

ゆめ「あんたら、うたちゃんが転校してきたときのこと覚えてる？」

音吉「覚えてる。わしは、昨日の事みたいに覚えている」

回想

（小学校の教室。椅子を引き生徒たちが立ち上がる音）

生徒A（女）「起立、礼、着席」

（着席の音）

先生（女）「新しいお友達を紹介します。中川うたさん、みんな仲良くしよね」

生徒B（女）「うたやて、おもしろい名前やなあ」

生徒C（男）「ゆめちゅうのもけっこうおもしろいで」

生徒B（女）「見てみ、音吉がポケーとした顔して、転校生の顔を見てるわ」

生徒A（女）「（離れて）手品師のおっちゃんか、どっかで拾うてきた子やて、お父ちゃんが言うてた」

（教室のざわめき小さくなり、風の音）

音吉「うたちゃん行こか。ああ、さつき歌てた思たら、また寝てる。起きや、行くで」

うた「もう、大好きな羊かん食べよとしてたのに。消えてしもたやんか」

音吉「夢や、夢。なんぎやなあ」

平三郎「また、明日こう。もういっぺん大阪城眺めて帰ろか」

ゆめ「あつ、見てみ、鬼がいるわ」

平三郎「石垣の上に座ってこつち見とる」

ゆめ「鬼が見えるときは運がええんよ」

平三郎「苦しまん、と、コロツと、死ねまつか」

うた「鬼は、年寄りが見る幻なんやろか。人の心を映す鏡や言う人もいる」

音吉「わしは、鬼なんか見たない」

（風の音。落ち葉を踏む足音）

うた「ほら、また、ビルの上から、旧式のパラシュートつけて、ほら、飛んだ。命かけてなんであんな阿呆な事すんのんやろ。何であんなに死に急ぐんやろ」

音吉「ビルダイビングや。毎日のように死んでる」
ゆめ「ビルの壁にへばりついて……。生きる目的失た若いもんが命がけでいちびってるんかいな」

うた「あんたもいっぺん飛んだら」

音吉「いやや、まだ命が欲しいわい」

うた「いつまで生きたら気が済むんやな、せやけど、

こうして見てるのは面白いなあ。あ、また、飛んだ」

平三郎「がんやエイズは征服されたし、アルツハイマーによう効く薬もできた。せやけど、その分だけ、みんな、味の薄い人生を背負うようになった気がするなあ」

音吉「あんたは、ずっと、髪の毛の薄い人生を背負うてる」

平三郎「お前みたいなおもろい顔よりましや」

音吉「ほっといて、おもしろい顔は、飽きがこうへん。ひ孫笑わすのにおもちやがいらん」

ゆめ「しょうもない事言うてんと、はよう浮見町に帰ろ。(歩く)うたちちゃん、いつまでもぽけつと空見てんと、おいとくで」

うた「(離れて)また飛んだ」

音吉「(歩きながら)バスはまだかいな」

平三郎「(歩きながら)バスはとつくの昔からあらへん」

音吉「(足音止まる)ほんなら、あれなんや？」

平三郎「あれ、バス停がある……」

ゆめ「昨日はなかった」

うた「(三人に近づいてくる)みんな、なにしている。バス停やんか……。よかった、後はバスに乗って帰ろう」

ゆめ「何でもすぐに信じられて、うたちちゃんは幸せやなあ」

うた「(少し離れて)バスはまだかいな。冬は寒いと決まっているのに、日溜まりは、ほかほかあったこうて眠うなる」

平三郎「あああ、かなんなあ、うたちちゃんがへたりこんで、また、船こぎはじめよった」

ゆめ「うちもはよ去んで、おこたで寝よ。今日も一日生かしてもうてありがとさんでございます」

平三郎「まだ一日おわってへんで、いつなんどき、コテつといくやら分からへんがな」

ゆめ「バスも来うへんらしいし、ほな、ぼち、ぼち去のか、おきや、うたちちゃん」

うた「うるさいなあ。うーん。(伸びをして立ち上がる)。あれえ、バスがきよった。まだ、夢みてるんやるか？ かげろうがたってる。その中をバスが

揺れるようにして、やって来よる。ほら、ほら、ほら

ゆめ「陽炎やて、阿呆な、この寒空に……」

平三郎「いや、ほんまや、ほんまに、バスがきよる」

音吉「待っててよかったなあ」

（バスの音が段々近づいてくる。そして止まる。扉の開く音。ドヤドヤと乗り込む）

平三郎「ちよっと待って、うちちゃん何してるんや、はよ乗らんかいな。なんぎやなあ、ほんまに。自分が乗るのを忘れて、外で手ふってるがな」

音吉「はよのり、よいしよと」

うた「どっこらしよ」

ゆめ「グズ」

うた「（即座に）ブス」

ゆめ「……」

（バスの扉の締まる音）

ゆめ「うちは窓際がええ」

音吉「（床に座り込む音）わしは、床がええ」

うた「うちは、一番後ろのひろーくて、ながーい席がええ。バスの揺れに合わせてもうひと眠りしよおと」

（バスが動きだす音）

平三郎「この揺れが何とも言えんなあ」

音吉「なんや、ほつとする」

ゆめ「バス乗んの何年ぶりやろ」

平三郎「わしは、高校の一年は電車で次の一年はトロリーバス、ほんで、次は、今乗ってる、（声を詰まらせる）」

ゆめ「トロリーバス……。なつかしいなあ、バスにアンテナつけて電車みたいに電線から電気もろて走るんや。どうしたん、平三郎さん。バスに感激して泣いてるんか」

平三郎「年とると涙もろうなって」

うた「（離れて）あ、大阪城の天守閣に夕日が落ちて行く。きれいやなあ。ビルの谷間のお城はほんまにかわいそうなくらい小さいわ」

ゆめ「あれ、うちら何処から大阪城を見てるんやろ？」

平三郎「なんやよう見たとこやと思たら、浮見町に帰って来てるがな、乗ったと思うたら、もう降りな」

うた「いやや、もっと、乗ってたい。何十年ぶりに乗れたバス降りるんいやや」

（バスのエンジンをふかす音）

平三郎「そんなむちやな、浮見町を通り抜けてしまうがな」

音吉「大阪城循環バスって書いたるわ」

平三郎「それやったら、安心や、何処で降りても直ぐに帰れる」

音吉「せやけど、動物園の熊みたいに同じとこばかりぐるぐる回ってるんて、なんや、阿呆みたいやなあ」

ゆめ「（独り言のように）おかしいなあ」

うた「なにがやの？」

ゆめ「ちよつとこつちきてみ」

うた「ゆめちゃん、なんか面白いもんでもあるの？」

平三郎「なにをぶつぶつ言うてるんや」

ゆめ「な、おかしいやろ」

うた「そう言うたら、そうやなあ」

ゆめ「たしか、去年、山田はんは、息子とこへ行つた筈や」

うた「そうや、そうや、今は誰もいてへん筈や」

平三郎「どないしたんや？」

ゆめ「ほら、やっぱりや」

平三郎、音吉「なにが？」

うた「ほんまや、見えたわ、洗濯もんが干したる」

（バスが止まる。扉の開く音。幸助さんがバスに乗ってくる）

幸助「こんばんわ、あら、あら、みなさん、おそろいで」

平三郎「幸助さん、何処へ」

幸助「いや、ちよつと」

(バスの扉の締まる音。走り出す)

音吉「あいかわらずやなあ幸助さん。若い頃から無口や。黙々と自転車の修理してはったもんな」

平三郎「それに、おしゃれ。作業服が油で汚れているようなことはあらへんだ。丸がりで、何時も、ジヤイアンの野球帽かぶつとつた。そういうたら、葬式の写真も野球帽かぶつとつたなあ。わしが酔うて、からんで、タイガースのなにかあ……」

ゆめ「えっ」

平三郎「あっ」

うた「(離れて、うたの笑い声) いややわ、

幸助「はんの助は助平の助や」

幸助「(離れて) えへ、そんな……」

音吉「せや、せや、町内であいつだけがジヤイアンツや。ジヤイアンの勝った晩、自転車屋の表を通ると、小さい音痴な声で、お経みたいな巨人の星歌てやがった。自転車のチューブ水につけながら、思い込んだら、試練の道を……」

平三郎「あのかなあ、音やん……」

音吉「(平三郎を無視して) 夜伽に、供養になるいうて、いややつたけど皆で巨人の星を歌わされたなあ」

平三郎「夜伽やろ、音やん……」

音吉「(平三郎を無視して続ける) それに、葬式の日には、息子さんがなあ、他の人に見せたら、破られたら困るよつて、濃厚で優しい、ほんで教養の溢れる音吉さんにだけ見てもらお言うて、古い茶色のペラペラの封筒を見せますんや、それに汚い字で、たからものと書いたんねん。何んやと思う？ ボロボロになつとつたけど、長嶋のサインやつた」

平三郎「よう喋りよつたなあ、とりあえず今とは関係ないことを」

ゆめ「それに、夜伽や葬式やいうて、なんにも思わへんねやろか」

音吉「思わへん……」

平三郎「あそこにいるのん誰や？」

音吉「誰やて、幸さんやがな」

ゆめ「誰の葬式の話してたん」

音吉「幸さんや、ありや……」

平三郎「（声を潜めて）ゆうれいや」

ゆめ「いや、違う。このバスがおかしいんや。町の様子が少しづつ変わって行く。ほら、あのコンビニは五年前店閉めたはずや。信屋先生はとっくに医院を辞めはったはずやのに、看板が前のままや。少しづつ昔に帰っていく。信じられへんけど、バスは時間を遡ってるんや。みんな、降りよ、何処へ連れて行かれるか分からへんよ」

（バスのとまる音。幸助さんがドアに向かって歩いてくる）

幸助「どなたはんも、お先に」

（うた、後ろの席から移動）

うた「幸助さんと話したんは、ほんまに久しぶりやった。（間）みんなどないしたん？」

ゆめ「うち降りる、家に帰る」

（ゆめがバスを降りる音）

ゆめ「（遠くで）幸助さーん。うちも帰る」

うた「ゆめちゃん行ってしもた。どないしよう」

音吉「わしらも降りよか」

（ゆめの足音。泣きべそをかいている）

音吉「あれ、あっちから来るのゆめちやうか」

平三郎「どないしたんや」

（ゆめがバスに乗ってくる。バスが動き出す）

ゆめ「幸助さん消えてしもた。ほんで、なんぼ行っても家に帰られへん。家の前まで行ったら、家がふ

つと消えてしまひよる。せつかく豪邸建てたのに。金庫にいっぱいお金入れたんのに。ワアアア（大声で泣き出す）」

うた「泣かんと羊羹食べ」

ゆめ「うん」

音吉「自分だけ帰るとするからや。あの世には金も豪邸も持つて行かれへんで。ざまー見ろや」

ゆめ「ワアアア」

うた「ほんまにせつかく泣き止んだのに、音吉はまた泣かすんやから」

ゆめ「うたちゃんはやさしいなあ。（明るく）羊羹もう一つ頂戴」

うた「いやや、うちののがのうなる」

ゆめ「ようけ持つてんのにケチ」

平三郎「喧嘩しな。まあ、泣くほど帰りたの家があるのはええこっちゃ。わしは、帰っても一人や。このバスの方がおもしろい。なんや音やん、わしの顔になんかついてるか」

音吉「ちよつと、辛いなあ」

平三郎「辛いことなんかないわい」

ゆめ「音さん、タマおったで」

音吉「えつ、十年前に家出したタマが」

ゆめ「三角公園で、泣いてた」

音吉「えらいもうろくしてたやろ」

ゆめ「のらくろみたいな顔して、生まれてまだ何日も経つてへんだ」

音吉「おかしいなあ」

平三郎「おかしい。おまはんの頭がおかしいんや。このバスは時代を遡ってるんやろ。十年前に家出した猫が、子猫になったんやから、二十年遡ったんや」

音吉「わしバス降りるわ、タマ探しに行く」

平三郎「おまはんが会いたいんは、人やのうて猫か。

ちよつと、辛いなあ」

音吉「何とでも言え、会いたいもんがないよりましや」

平三郎「なににお、言うたなあ」

音吉「それがどうした」

ゆめ「やめつて、ええ年してつかみ合いなんかして。音さん、行つてもしゃないよ。タマはうちの両手の

中で、溶けるように消えてしもたんやさかい」

(ブリッジ音楽)

うた「時間を遡るバスなんやて。ほな、終点でお母ちゃんに会える」

音吉「ふん、お母ちゃんの顔も知らんくせに。その前に恋しい清次に会えるわ」

うた「あんな奴に会いたない」

(白鷺の鳴き声)

音吉「白鷺がようけ飛んでる。初めは、自然が帰ってきた言うて喜んでたけど、ほんま、喧しいだけの鳥やなあ」

ゆめ「ほら、あのビル、平三郎さんの会社やろ」

平三郎「降ろしてや」

うた「何処行くの？」

平三郎「何処行くて、会社に決まってるがな。はよ、合理的なシステムをつくらな。合理化や、合理化が一番」

ゆめ「あんた、もうとつくに会社辞めてるて」

(バスの止まる音。ドアが開く。算盤を振りながら乗り込んでくる。振る算盤の音。ザッ、ザッ、ザッ、ザッ)

ゆめ「なんや、この人ら、みんな片手に算盤もつて」

平三郎「あつ、山本さんやないか。松本主任。有本課長もいたはる」

男(A)「あつ、わしらから仕事奪うた平三郎がいよる。ザッ、ザッ、ザッ」

男(B)「わしらの仕事を返せ。ザッ、ザッ、ザッ」

男(C)「面白かった仕事を返せ。ザッ、ザッ、ザッ」

男(A)「算盤を返せ。何年もかかってつかんだ技を返せ。誇りを返せ。ザッ、ザッ、ザッ」

男(B)「家に帰って飲む、一杯のビールの旨さを

返せ。ザツ、ザツ、ザツ」
平三郎「合理化や、合理化や、（叫ぶ）もう、あんならは、みんな、いらんねん、ご破算なんや（算盤の音、ザツ）」

（算盤の音一斉に止む。（間）。）

うた「みんな消えた」

（バスが動き出す）

平三郎「わしが入社した頃は、計算部は算盤の音だらけやった。わしは、算盤が出来ひんよって、電卓専門。人差し指の平やんいうて、みんなに馬鹿にされてたんや。わしが目つけたんはコンピューターや。わしには先見の明があつたんや。もう、算盤の時代やない」

音吉「わし、まだ算盤つこてるで、別に不自由や思わへん」

平三郎「規模が違う規模が。酒屋の経理なんか指でやったらええねん」

音吉「えらい言われかたやなあ」

（バスが止まる）

平三郎「ここや、このビルの35階、計算部がわしの職場や」

音吉「なんやこのビル空き家みたいやで」

平三郎「なんやて、そんなアホな。行ってみる、この目で見てみる」

音吉「ほんなら、行き。わしらはバスで待ってるさかい」

（平三郎、バスを降りる）

ゆめ「平さんの会社つぶれたんやろか」

うた「辞めた会社でも、どうなったんか心配なんやろか」

音吉「平さん、会社人間やったさかい」

(バスのドアの開く音。バスに乗ってくる平三郎の足音)

音吉「平さん帰ってきた。ほんで、計算部はあったんか？」

平三郎「(少し離れて) あった。窓硝子は割れ、ロボロになつて、電気も消えて、誰もいてへんだ」

ゆめ「あつただけでもよかつたやん」

平三郎「白鷺が一匹、部屋の真ん中で死んどつた」

うた「白鷺？」

平三郎「(近づき、シートに腰を下ろす) あんまり高こう飛びすぎたんや」

(白鷺の鳴き声。バスが動き出す)

平三郎「合理化！」

3人かかつてた仕事を一人！

システム！

そんな考え方は、論理的やない！

そない言うてるうちに、広い部屋にわし一人、窓から、大阪城見るんが仕事になつた。晴れた日、大阪城見てると、鬼が、天守閣で、わしの方をじつと見てるんや。わしを笑てるんやろか、哀れんでるんやろか：：。ほんで、思い出したようにトンボを切りよる。(うなだれて) あの時からや、鬼が見えだしたんは」

音吉「窓際族になつて、鬼が見えたんか」

平三郎「ほんで、しばらくしたら、首や。合理化してるつもりが、何時の間にやら、自分も合理化された。あほみたいや」

ゆめ「それでも、年金もろて、大阪城の絵書いて、去年は個展まで開いたやん」

平三郎「(明るく) うん、せや、大阪城をぼけっと見てんのも飽きたし、わし、鉛筆で、城の絵を描いた。春の大阪城、夏の大阪城、秋の大阪城、冬の大坂城。同じや思うてたけど、みな違う」

音吉「ふん、ええ気なもんや、会社に守つてもうて、退職金もろて、年金もろて、趣味で絵を描いて。おしら、商売人は、定年も年金もないかわりに、今の今まで働きづめや。馬鹿にすんな。なんや、あんな

絵、どこにも鬼がおらへんやないか。嘘っぱちや」
平三郎「うるさい。上司には逆らわれへん、言いた
いことも言えへん、自分の時間を切り売りしてたも
んの苦労なんかお前から分かってたまるか。昼の日
中から、女の尻追いかけてやがって」

音吉「なんやと」

ゆめ「二人とも、何をおこってんの、そんなことど
うでもええやん。うちは、お金があつたらええ」

うた「うちは、そばに優しい人がいたらええ」

音吉「女はええなあ、かっこつけんでええよって」

(バスが止まる)

うた「(離れて) 雪がちらほら降ってきた。(歌
う) 雪やこんこん、霰やこんこん」

ゆめ「銃を担いだ孝之さんの銅像の肩に雪が落ちて
なんやさみしそやなあ。西暦2010年国民栄誉
賞」

(遠くで「おっちゃん」の声)

平三郎「まさか、銅像が喋るかいな」

ゆめ「日本に志願兵制度が出来て、初めての戦死。
世界正義のために異国で倒れた、若き英雄。テレビ
や新聞がようけ来た」

音吉「泣かなあかん親父さんが、まちごて、カメラ
に向かつて、ピースってやったもんなあ」

平三郎「そういうたら、わしらは戦争の知らない子
供たち言われた時もあつたなあ」

ゆめ「それから、団塊の世代」

平三郎「せやけど、いつも勝たなあかん言われ続け
てきた気がする。いつも戦中派や、わしら」

(バスの窓を叩く音。近くで「おっちゃん」の声)

平三郎「孝之……」

孝之「おっちゃん、この銅像壊して」

平三郎「なんでやねん。お前は名誉の戦死をしたん
やろ」

ゆめ「そや、あんたは町内の英雄やで。ほらみて

み、音さんなんか、サインしてもらお思て、ポケットひっくり返してるやんか」

音吉「あった、あった、(間)鼻紙しかないけど」

孝之「サインやなんてとんでもあらへん。本当の話きいたら、僕のサインなんか、お尻ふくのにも使わへんと思う」

平三郎「本当の話……」

孝之「戦争いうても、敵の姿を見たことあらへん。弾も飛んでこうへん。平和なもんやった」

平三郎「平和な戦争やて、なんやそれ」

ゆめ「テレビで見た国連平和軍は目がギラギラしてて、気楽そうに見えへんだけだ」

うた「服も汚かつたし、痩せてた」

孝之「ああ、あれ、あれはテレビの撮影用や。顔に炭塗つて、みんなスター気取りや」

平三郎「なんや、やらせやつたんかあれは」

孝之「せやけどおっちゃん、戦争はおもろかつたで。いろんな国の武器があつたなあ。アメリカ、フランス、ニッポン。使い放題や。ほんで、晩になったら、ミサイル撃つて、花火大会や。日英米で、玉屋！」

平三郎「おまえらアホか。テレビで見たミサイルはお前らが撃つとたんか」

孝之「うん、せや。テレビゲームみたいやで」

平三郎「国連平和軍は、戦争やめさしに行つたんちやうんか。それやつたら、たきつけて、けしかけるやないか」

ゆめ「まあ、いちいち怒らんと、話聞こ、平さん」

孝之「暇な時は缶けりしたりして遊んでん。ある日、ジョンちゆう犬みたいな名前のアメリカ人が、地雷を見つけよつてん。道の真ん中に落ちてたんや。それは、おおきなウンコの形をしてん。おもちゃや、孝やれ、ジョンは言いよつた。それが周りに広がつて、孝やれの大会唱や」

ゆめ「何をやれて？」

孝之「ぼく、音痴やし、何にも芸あらへん。パーティーの時、えらい困つて、赤のふんどしいっちょで走つたら、それがえらい外人に受けてん」

音吉「ふんどし、えらいもん持つていつとてんなあ」

孝之「ぼくの趣味やねん」

音吉「おっ、赤フンや」
孝之「ブル、さむ。かわいらしいのが顔だしてへんかを確認してと。よーいどん」

(走る音)。

孝之「天皇陛下万歳(倒れる)」

平三郎「おもちゃの地雷の上に倒れたんか？」

孝之「ほんで、真っ白になった」

ゆめ「ほんもんやったんかいな」

うた「ぷっ(吹き出す)」

ゆめ「うたちゃん」

うた「あいた、なんでつねんの」

孝之「みんなまだ笑たまんまの顔しとった。顔の筋肉が直ぐにもどらへんだんやろな。その顔の上に、ぼくの、肉や、血が、ポタポタと。世界正義のための名誉の戦死か……。 (間)。せやけど、りりしいええ顔しとるなあ。一生でこんな顔したこと一回もなかったやろう。ふ、寒う。服着て、今日は、イタリアの銃かつご。(間)なあ。(泣き声になる)お願いや。この銅像、壊して。僕は英雄やない」

音吉「肩の銃が重そうや」

うた「孝之さん、ふっと、かき消すように消えてしまった」

(孝之さんの出征、万歳の声)

うた「あ、孝之さんの出征や」

ゆめ「孝之はん、行ったらあかん。孝之さんがかわいそうや」

音吉「わしら」

平三郎「わし、旗振って、万歳言うた」

うた「うちも言うた。かんにん。人間ってアホやなあ、21世紀になっても何もかわってへん」

平三郎「世界正義に踊らされて名誉の戦死。ほんで、

死んだ後も、英雄という名前で、踊れ！、か。むご

いなあ」

うた「あっ、孝之さんがうちにむこうて、敬礼を

したはる」

音吉「わしらもしたる。な」

(人のざわめき、万歳の声。小さくなって、消える。地震)

平三郎「なんやこれは」

全員「わあー地震やあ」

ゆめ「阪神大震災や」

音吉「ふっ、やっとな収まった」

うた「うちらは大したことなかったけど。神戸は大変やった」

平三郎「みんながんばったもんなあ。二十一世紀には、神戸は首都や」

音吉「総理大臣はくじ引きやけど」

うた「この頃はいろんな事があった」

平三郎「オーム、オームで無茶苦茶やった」

音吉「ノックが知事になりよった」

ゆめ「ほんでノックダウン」

平三郎「大リーグ相手に、野茂がバツタ、バツタ三振の山。世紀末で唯一の明るい話題やったなあ」

うた「(離れて)あれ、誰かバスを追い抜いていきよった」

平三郎「秀雄さんとちやうか？」

ゆめ「まさか、うちの人が」

音吉「バスより速い。なんであんなはよ走らなあかんねんやろ」

うた「秀雄さん、何で博打になんか狂たん？」

平三郎「酒も呑まへん、物知りで、浮見町のソクラテス言われたはった。気の小さそうな人やった」

(バスがエンジンをふかす)

平三郎「やっぱり秀雄さんや」

秀雄「ハッ、ハッ、あの時は夢中になるもんが何んもなかった。いいや、せやない、子供の頃からな

んもなかった。秀ちゃん、勉強できるよって先生がええわ、周りから言われて、先生になつたけど、

子供がおおてしやなかった。先生のわしの方が登校拒否。毎日パチンコに行ってたんや。そのうち博

打が面白くなって……」

秀雄「なんや、ゆめか。面目ない」
うた「秀雄さんバスに乗って話そ」
秀雄「ほんなら、走んの疲れたよって乗せてもらお
か」

（秀雄バスに乗り込む）

ゆめ「あんた、あの景気のええ時分、三度のご飯が
食べられへん家があるやて、信じられる？ 病院の
まかないやってて、残ったご飯、人の目盗んでおに
ぎりにして、家に持って帰って子供と二人で食べた
んよ。子供のほったにご飯粒ついたんを、取って
やって、口に入れたら、明日のこと忘れて、ふつと
笑うた。亭主が働いてのんびりしてた頃は味われへ
んだ幸せやけど」

秀雄「どんな時も真つ暗はないんやなあ」

ゆめ「よう言うわひと事みたいに。子供の手引いて、
線路の上歩いたんや。もう、どうなつてもええ……。
せやけど、なんやしらん、急に腹がたつてきて、な
んで、あんたのために死ななあかんのや。ふと、見
たら手の先に小さいのが、ぶら下がってる。去のか、
ほんで、今日は、ラーメンつくつたら言うたら、嬉
しそうな顔して、笑いよつた」

秀雄「苦労かけたなあ、わしも色々理屈いうけど、
結局は博打が面白かったんやと思う。先が分からん
ということは何ものすごい面白いことなんや」

ゆめ「勝手やなあ、それで、うちと子供を置き去り
にしたんか」

（競艇場の歓声）

秀雄「行け、行け、行きさらせ。やった、やった、
やったで」
背後の声「おっさん、よかったなあ、おおもうけや
ないか」

（競艇場の歓声）

秀雄「行け、行け、行きさらせ。行き……」
背後の声「勝負は時の運や。また今度やおっさん」

秀雄「ああ、あかん。215……。そんな気もしたんやな。裏目ばかりや。また、野宿や」

(競艇の歓声消える)

秀雄「家へ帰るか、帰って、お前に謝ろうか、もう一回やり直そかとなんぼも思もた」

ゆめ「うちは、人の倍働いた。そのうち賄いの他に金貸しやった。借りる時は拝むのに、取りに行ったから、鬼のように言いよる。遊ぶためのお金ばっかし借りよって、金かしの方がずーと貧乏やった。あんた」

秀雄「へーい」

ゆめ「あんた、自分がどんな死に方したんか知ってる？」

秀雄「知らん。いつ死んだんかも知らん」

ゆめ「おらんようになって、最初の何年間はよう捜しに行った。おったという場所に行くと、昨日までとか、一週間前とか、結局、死ぬ時まで会わへんだ。捜しに行つて聞くあんたの話は、うちの知ってるあんたからは考えられへんことばかりやった。お酒のんで、客と喧嘩したとか、お金を盗んだとか……。初めておうた人やのに親身になって、あんなんとは、別れた方がええという人も、ようけ、いたはった」

秀雄「もうええ、なあ、わし何処で死んだんや？」

ゆめ「病院」

秀雄「てつきり野たれ死にや思てた」

ゆめ「……」

ゆめ「病院に駆けつけると、あんたのベッドは、廊下やつた。空の点滴瓶つけて、それに針も外れてた。手を握ると少しあつたかかった。酔うて、ドブに足突っ込んで動けんようになった。靴脱いだらすぐに抜けられるのに。アホやほんまに、あんたの博打と一緒や」

秀雄「寒かった。何やそれだけ覚えてる。(間)。もう、ええ、いわんといて、堪忍や、ほんで、わしは空の点滴瓶つけて、死にかけとったんか……。みじめやなあ、ほんまに」

平三郎「博打の誘惑にまげんと、平凡に暮らしてた

ら、今は一緒にバス乗ってたかもしれへん」

秀雄「子供は？ えーと」

ゆめ「あーあ、子供の名前も忘れたんかいな。元氣やで、あんたと一緒に学校の先生で、ちよつとも、道はずさんと、この前古希やつた」

秀雄「それは、よかった、ほんま、よかった。すまんかった、ゆめ、堪忍してや博打はもう、こりごりや」

ゆめ「うち、金持ちになつたんよ、もういつペンやりなおそ。も、学校行かんでええさかい」

秀雄「えっ、ほんまか」

うた「何言うてんの、死んだ人にむこて」

平三郎「秀さん、こっちおいで、一緒にお茶でも飲もう」

音吉「マツチの軸賭けて、花札しよ」

秀雄「（もじもじしながら）それが、こうはしてられしまへんね」

音吉「急ぎの用事でもあるんか？」

秀雄「ダービーの締め切りがもうすぐやねん。ほな、さいなら」

（秀雄バスを降りる）

うた「あほらし。せやから走ってたんか」

音吉「死んでもなおらんか」

うた「せやけど、ゆめちゃん、秀雄さんに会えてよかつたやん」

ゆめ「うん。（思い切るように）音さん、マツチの軸かけて花札しよ」

平三郎「あんた、博打、憎んでたんと違うの」

音吉「（手を叩く）よし、やろう」

うた「うち、負けへんで」

音吉「わあ、さんこうや」

平三郎「ちきしよう、坊主ばかりや」

音吉「ハゲ坊主やろ、マツチの軸三本」

平三郎「持って行け泥棒」

うた「おもしろい？」

平三郎「おもしろない。音やんマツチの軸で鼻くそほ

じくんのんやめ」

うた「うちの羊かんかけよか」

ゆめ「(弾んだ声で)うん」

(四人の花札に興じる声小さくなる。バスの音。自動車は猛スピードでバスを追い抜いていく。自転車のベルの音)

音吉「風やんやないか」

風やん「なんや、音吉にいさんか」

音吉「ぷっ、にいさんやて」

うた「うちらはいくつに見えるんやろ」

音吉「風やんどこ行くんや」

風やん「めばちこできたよって、鶴橋の目医者行くねん」

音吉「お前も白髪が目立ってきたなあ」

風やん「アホは年とらへんのに、言いたいやろ」

平三郎「せやけど、風やんはほんま男前やなあ」

音吉「千代の富士みたいや」

風やん「おおきに」

音吉「それで、しゃべらへんだら、ほんま、ようもてるで」

風やん「こんなところで、いちびってんと、目医者い

こ。あるときは、片目の運転手、そして、その実体

は、正義と真実の人、藤村泰造、ばーん、ばーん。

はいよシルバー、ローレン、ローレン、ローレン」

うた「気つけていきやあ」

風やん「おおきに、ローレン、ローレン、ローレン

(次第に遠ざかっていく)」

ゆめ「えらいこっちゃ、鶴橋行くて言うてたなあ。

風やん止めて」

うた「ゆめちゃんどうしたん」

ゆめ「鶴橋で、車にぶっかって、ほんで風やんは」

(ローレン、ローレン、ローレンの小さい声)

音吉「風やん」

うた「自転車は、空を駆け上がっていく」

ゆめ「消えた」

(ローレン、ローレン、ローレンの小さな、小さな声。一拍おいて、大きく、ローハイド)

ゆめ「軒下のバケツに植えた紫陽花がきれいなあ」
平三郎「雨の日の紫陽花か……。花が光を含んでる
ようや。都会の下町には季節がないような気してた
けどなあ。気がつかへんだだけかもしれへん」

うた「ビルが溶けるように消えていく」

平三郎「森ノ宮造兵廠跡が現れた」

音吉「ほんま廃墟や、幽霊みたいや」

平三郎「長い間、空襲におうたままの姿で放った
らかしにしたった」

平三郎「音やん、見てみ、廃墟と、京橋のネオンの
海と一緒に眺められるわ」

音吉「どっちがほんまなんやろ」

うた「大阪城が、きれいなあ。鬼はもう、眠てしも
たんやろか」

（歓楽街）

うた「京橋のあのクラブ、うち、ママしてたんや」
ゆめ「下町の歌姫から、ストリップパー、ほんで雇わ
れマダム」
うた「なんやしらん、いつも音吉がおった」

（クラブの喧噪。「うたちやん、こっち来て」の
声）

うた「うち、えらい人気や」

ゆめ「男だまして、金巻き上げる。うちもやりたか
ったなあ」

音吉「誰が、ブスに貢ぐか」

ゆめ「言うたなあ、あんたに貸した二十万円返し」

音吉「知らんなあ。未来の借金なんか、返されへ
ん」

ゆめ「……」

うた「そんな、男を騙すやなんて。うちが騙されて
ばっかりやった」

（バスのエンジンをふかす音）

平三郎「バスのスピードが上がったんちやう」

ゆめ「うん、町の様子がどんどん変わっていく。万博まであと30日」

うた「うちの家が現れた。あの文化住宅、うん、あの長屋。新建ち言うたんや。あつ、清次がいる。清次さんがうちに会いに来たはる。降ろして」

音吉「行ったらあかん、行ったら、不幸になる。会いとうないて言うてたやんか」

うた「お願い、とめて、降ろして、降ろして下さい」

音吉「（叫ぶ）行ったらあかん」

（バスの止まる音、ドアが開く音。駆け出すうたの足音、追いかける音吉の足音）

平三郎「何処へ行くんや」

音吉「決まってるやろ。うたを止めるんや」

平三郎「なんで、好きやといわへん」

音吉「わしは、いじめっ子の音吉、助平の音吉、それでええ。せやけど、清次は、うたを不幸にする。流れ者にうたは渡されへん」

平三郎「お前の百年の片思いも辛いやろう。せやけど、うたは、死ぬほど清次に会いたいんや。それが

あの子の恋や」
音吉「やかましいわい」

（平三郎を振り切って、音吉バスを飛び出す。バスのドアの閉まる音）

音吉「バスが消えよった。ここは何処や」

（ストリップ劇場の雰囲気。音楽、野次がドアへ越しに聞こえてくる）

うた「音さん」

音吉「うたちゃん」

うた「あの人、見失のうた」

音吉「ええやん、バスに帰る。あつ、歌の出たストリップや」

うた「ほんまや、あんた、よう来てたなあ。ほんで、いつもうちの出演になると、こそこそ逃げ出して。

意気地なし」

音吉「あほ、お前の裸なんか、見たないわい」

うた「嘘つき。見たかったくせに」

音吉「ようし、ほんなら、今見たろ」

うた「そんなんあかん、卑怯もの」

(音吉、扉を押す。客のざわめき)

音吉「なんや、ストリップとちやう」

うた「あつ、ここは通天閣の小屋や。七つの時から、お父ちゃんに連れられて、祭りや芝居の舞台に立って、歌てた。うちは浮見町の歌姫。清次はやくざのヒモ。稼いだけもって行かれた」

司会者「下町の歌姫の登場です」

(拍手)

うた「心で好きと叫んでも 口では言えず

ただあの人と 小さな傘をかたむけた」

客「(かけ声) うたあ、ちゃん」

うた「おおきに

ああ あの日は雨

雨の小径に、白い仄かな からたち

からたち、からたちの花」

(歌が少し遠くなり、音吉の科白が重なる)

音吉「からたちの花って、どんな花やろ」

(拍手が小さくなり、消える)

音吉「あつ、真っ暗になった。(叫ぶ) うた」

(どーんとぶつかる音)

手品師「ぼん、大丈夫か」

音吉「ふっ、ぼんやて。百才がぼんに見える。なんやこは。手品師のおっさんの大きな影の手の先に、ほんま、ほんま、小さい女の子がぶら下がってる」

うた「あれ、七つの時のうちや」

音吉「いつぺんにそんな頃に来てしもたんか」

うた「うん。うちが浮見町に来た晩や」

音吉「あん時、初めてあんたに出おたんや」

うた「音ちゃん、うちらだけ、子供の頃に来てしもた。もうバスには戻られへんねやろか。迷子になつたんやろか。うち怖い」

音吉「大丈夫やて、わしがいる」

（「物干し竿」の声。遠く離れて、傘、修繕の声。軒下の風鈴）

うた「ここがうちの家や。お父ちゃんがいる。ほら、この窓から覗いてみ」

音吉「いたはる。ほんまに大きな人やなあ。座つてたら、畳一枚ぐらい場とつたはる。この熱いのに燕尾服を着て」

うた「あの服の下に、いつぱい手品の種を仕込むんよ。音ちゃん、あの人、うちの本当のお父ちゃんとちがうねん。手品師にするつもりで、旅の一座からもろうてきはつたんや」

手品師「お前、ぶきちよで、手品はあかんけど、歌が上手やなあ。下町の歌姫や、ふっ」

うた「殆どしゃべらんと、大きな体を申し訳なきそ
うに小さくして、お酒を飲むのだけが楽しみやつた。
酔うと、指先から、次々とランプが出てくる。ま
るで、美しい夢のようや」

音吉「あつ、シルクハットをかぶらはつた」

うた「出かけるみたいや」

音吉「ついて行こう」

（町のざわめき）

うた「スーパーへ行かはるんや。足が弱って、地方へはもうよう行かはらへんだ。せやけど、スーパーや百貨店の屋上で、子供ら相手に手品するのがものすごう楽しそうやねん」

（スーパーのざわめき）

子供A「わあ、鳩や、すごいなあ」
子供B「今度は、白いのんちごて、飴色のんだして」

手品師「飴色のんは、ちよっと旅に出て留守なんや。かわりに、こんな花をあげよ」

(女の子の泣く声)

女の子の母親「すんません。この子にも貰えませんが、兄妹で喧嘩してしもて」

手品師「ああ、かまへん、かまへん。ほら、いくつでもでるんや。うた、あの子にあげて。ほな、後頼むで、ちよっと疲れたよって、あしよこに座って聞いているわ」

うた「りんごの花びらが

風に散ったようなあ」

手品師「(呟くように) 月夜に、月夜に、そつと：

子供A「おっちゃん、どうしたん。なあ、おっちゃん」

うた「お父ちゃん、お父ちゃん(声が、小さく小さくなる)」

(野球の実況放送が家から、漏れてくる。そして、遠ざかる。犬の遠吠え)

うた「おとうちゃんが死んで、うち、みなしご。音ちゃん、手つないで」

音吉「(間) うん」

(数人の子供の走る足音が二人を抜き去って行く)

子供「あっちやど、旋回しとる。ホイラーン」

音吉「トンボつりや。まだ空き地がようけあった」

(チャルメラの音。小さな足音)

うた「音吉ちゃん、何してんの？」

音吉「(蹲りながら) 蛤をセメントで、擦ってんねん」

うた「貝笛作ってんの？」

音吉「そうや、こうやって、貝の背中擦ってたら、穴が二つ開きよるんや、そしたら、唇に当てて、吹くんや。あいた、指こすってしもた」

うた「えらいこっちゃ、血出てるやん。うちが吸うたげる」

音吉「うたちちゃん……」

うた「音吉ちゃん、貝笛吹いて」

（貝笛、曲は「ふるさと」。バスの近づいてくる音）

うた「あつ、バスや」

（バスが止まる音）

ゆめ「なにしてたん。はよ乗り」

（バスのドアの開く音。二人が乗り込む。バスの動き出す音）

平三郎「大阪城の石垣に、鬼が座ってる」

ゆめ「鬼には、時の流れは関係ないんやろか」

平三郎「なんや、寂しそうやなあ」

音吉「わしらこれからどうなるんやろ」

ゆめ「どんどん、小さくなって、おかあちゃんのお中へ戻って、それから……」

うた「ふつと、消えるんやろか？」

平三郎「死ぬということは、そんなんかもしれへん。

だあれも知らんねんから」

うた「はよ、おかあちゃんの、あったかいおなかの中へ戻りたい。やつと、お母ちゃんに会える」

（バスの音消える。（間）。風の音）

警官「（遠くから）もう、お帰りか？　せやけど、

そんなとこでなにしましたりますのや」

ゆめ「あつ、おまわりさん。なんや、三郎さんかいな。バス待ってんねん」

警官「バス？　そない言いうたら、そのへんにバス

停おましたなあ」
平三郎「近くの交番に勤めてるのに、時々帰ったらんかいな」
警官「なんやかやと忙しいて」
音吉「まあ、盆にでも帰ってくるんはええとせな。うちなんか、何年も帰ってこんわ。猫や犬が家族や。あれ、指の先けがしてる。何時したんやろ、血も出てる。それと、何か言うこと忘れたみたいないな気がするなあ。誰か知らんか？」
平三郎・ゆめ「知らん」
ゆめ「三郎ちゃん、あんたとこの隣の家、昨日の雨でつぶれたで」
警官「だあれも住まんようになって三十年、つぶれても不思議やないなあ」
ゆめ「ほな、ぼち、ぼち、去のか」
平三郎「なんぎやなあ、うたちゃん寝てしもてる」
うた「うーん、よう寝た。あれ、みんな帰るんか、ちよつと待って。なんやこれ、うちの足下で、うちが寝てる」
ゆめ「うたちゃん、帰るで、起きや。どうしたんうたちゃん。みんな、はよ来て、うたちゃんうが、うたちゃんが」
うた「なんや、うち、死んだんかいな、それにしても、みんな慌てて。音吉なんか、あれあれ、泣いてくれて。おおきに、みんな」
音吉「うたちゃん、わいは、わいは、あんたが好きや」
うた「おかしいなあ、泣きながら、音吉がなんか言うてる。もう、うちには聞こえへんよおお。体がかかるうなつた。死ぬ死ぬって怖がってたけど、こんなもんかいな。うちの百年、面白かったなあ。あれえ、バスが来よつた。うち、まだ、夢みてるんやろか？ かげろうがたってる、そん中をバスが揺れるようにして、やつて来る。ほら、ほら、ほら、ほら」

平成七年八月十五日

終戦記念日 了

一九九五年

